テロリズムと私小説——リービ英雄の表現と『千々にくだけて』

柴田勝二

1　曖昧な同一性

日本に在住する外国人の日本語による文学作品は近年珍しくなくなっている。芥川賞を受賞した楊逸や『万葉集』の研究から作家へと活動の領域を拡げていったリービ英雄、あるいはスイス生まれで日本語での創作を手がけるデビット・ゾペティなどがその例となるが、なかでもアメリカに生まれて東洋人の血を一滴も持たないにもかかわらず、現代日本の代表的な作家の一人となったリービ英雄は、現代における日本とアメリカの文化的な交渉を考える上で重要な存在である。

もっともリービは人種的には完全に白人であるとはいえ、その来歴には特異な面があり、誕生時から〈東洋〉との関わりを刻みつけている。それを端的に示しているのが、完全な筆名ではない「リービ英雄」という名前である。リービの本名は「イアン・ヒデオ・リービ」であり、「ヒデオ」は父の日系二世の友人から受け取ったもののようである[1]。こうした命名にも現れているように、ユダヤ人であるリービの父は中国史を専攻し、後には台中の中国語研修所の所長や、東京の日本語研修所の所長を歴任した人物で、リービも六歳から一二歳まで主に台中に居住するなど、幼少期からアジア圏での生活の経験を持っている。漢字の本も生まれたときから家にあったのであり、リービは現在でも中国語にある程度通じている。ワシントンの高校を卒業後はリービはプリンストン大学に籍を置きながら繰り返し日本を訪れ、日本に在住する父と対立しつつ、早稲田大学などで日本語を学び、『万葉集』をはじめとする日本文学の魅力に眼を開かれていくことになった。

こうした出自や経歴が、リービ英雄の独特の立ち位置と眼差しをもたらしている。その歩みが映し出すものは、英語・中国語・日本語という三つの言語圏を自在に移動しつつ、幅広い文化的背景と複眼的な視点によって作品を生み出していった国際的作家の姿ではない。むしろリービ英雄は何重もの疎外と逸脱を重ね、複数の文化圏に通じる回路を持ちながら、そのいずれにも合致しきれない違和とズレのなかに生きてきた表現者にほかならない。出自としては、リービの父はブルックリン出身のユダヤ人、母はカトリックのポーランド系移民の娘であり、それを映すように処女作の『星条旗の聞こえない部屋』（『群像』一九八七・三）では主人公ベンは日本人学生に「あなたは何系ですか」と問われて「半分ポーランド系で、半分ユダヤ系で

す」と答えている。それは自分がそのいずれにも属さない存在であるという意識の表明でもある。

学園紛争の進行する一九六七年の早稲田大学に学んでいた当時の経験を素材とし、ほぼ作者自身に同定されるアメリカ人の青年を主人公とするこの作品で、ベンは「イングリッシュ・カンバーセーション・クラブ」のメンバーに、「あなたはイスラエルを支持するでしょう」と聞かれても「ぼくは関係ない」と答え、さらに「あなたはユダヤ人でしょう」（傍点原文）と食い下がられたのに対しても、「ぼくはイスラエルの夢を持っていないユダヤ人です」という返答をしている。また自分が暮らす横浜の領事館の前で「ヤンキーゴーホーム」と叫ぶ集団の声を耳にしても、ベンはユダヤ人である自分が「「ゴーホーム」と言われても、いったいどこへ行けばいいのか。ブルックリンなのか、上海なのか、それとも幻のエルサレムなのか」という感慨を覚えるのである。『ノベンバー』（原題『新世界へ』『群像』一九八九・一〇）でも同名の主人公のベンは新宿の「風月堂」で出会った少女たちに、自分が属する「外人」の範疇を聞かれ、「ソルジャー」「ツーリスト」「ミッショナリー」「ヒッピー」といった規定をいずれも否定したあげく、「じゃあんたはいったい何なの」と問われて、「ぼうめいしゃです」と返答し、彼女たちに訝しがられるのだった。

ここに示されている、世界の各地に身を置いてきながら、どこにも自分の本当の「ホーム」といえる場所をもたない「ぼうめいしゃ」であるという流離の感覚が、リービ英雄の作品群を貫いている。リービの小説作品の特徴は、そのほとんどが作者にほぼ同一化できる人物を主人公としていることで、その点では日本の伝統的な私小説の系譜に置かれる性格を帯びている。『星条旗の聞こえない部屋』はその代表的な作品であり、一九六七年に設定された作品の時間において、主人公ベンが学園紛争の最中にある早稲田大学に通い、日本人の上級生と交わりを持つのはリービ自身の経験と合致している。住居が横浜のアメリカ領事館にあり、父との対立からそこを出て新宿近辺の下宿に住まい始めるのもそうであり、その父に複雑な宗教的、文化的な背景が与えられているのも事実に即している。ベンの父は、作者自身の父と同じく中国の言葉や歴史に通じ、「「宗教は」と聞かれると、父は躊躇なく「うちは儒教です」と答える」シニカルな人物であった。ベンの父がユダヤ人でありながらあえて自身の宗教として「儒教」を挙げるのは、彼がベンの母であるポーランド系カトリックの女性と離婚した後、二十歳若い中国人女性と再婚したため「ブルックリンにいる一族、すなわち自分の民族に背く行為とみなされて、それが義絶の原因となった」からであるとされるが、彼の作中での結婚をめぐる履歴はリービの父のそれを写し取っている。

一九六〇年代末の新宿と、暗殺されたケネディ大統領の葬列にワシントンDCで遭遇する一九六三年の二つの「ノベンバー」の間を往還する『ノベンバー』における主人公ベンの経験も、作者自身のそれと重ねられる。『国民のうた』（『群像』一九九七・一一）ではワシントンに帰郷した主人公が、父と離婚し、重い知的障害をもつ弟と暮らす母と再会する話が語られるが、この主人公を取り巻く家庭環境も作者自身のものと同一である。あるいは「9・11」の連続テロ事件との遭遇を主題とする『千々にくだけて』（『群像』二〇〇四・九）にしても、作者自

身の経験した出来事に基づくものであり、ワシントンに帰るはずであったところがこの事件によってアメリカへの入国ができなくなり、カナダ・バンクーバーでの宿泊を余儀なくされるという作品の展開も事実に即している。

こうした私小説的な設定のなかに繰り返し主人公を置くのは、第一に今眺めたようなリービ自身が抱える自己同一性の危うさ、曖昧さを焦点化するためにほかならない。『ノベンバー』では新宿の街を彷徨しながらベンは「お前はどこから来たのか。／お前は何のためにここにいるのか。／お前は何で帰らないのか。（／は行換え）」という仮構の問いを自分の内に響かせるが、文学の主題としては普遍的ともいえるこの自己同一性の問題に具体的な内実をもたらすために、作者自身の来歴、経験がその好適な備給源となっている。

リービの現実の生活経験においても、彼はアメリカ、台湾、日本で少青年期を送りながら、結局どこの国も自分の真の〈母国〉となることはなく、青年期から学習を始めた日本語という言語を自己の〈住み処〉として意識することになる。『国民のうた』では主人公の「かれ」はワシントンの家に帰ったものの、そこでの時間は一向に彼を安らがせず、知的障害者の弟に言葉をかけてやらないのを見た母に「どうしたの？　日本人といっしょにいすぎて自分のことばを忘れてしまったのか」（傍点原文）と言われてしまう。またそうした態度に接することで彼の頭の中では「「帰りたい」という日本語が鳴り響」くのである。

2　〈悪〉による連携

なかでもこうした、現実の生活の時空が主人公を安らがせない危うさと、彼を受容する器としての「日本語」が互いを際立たせながら結合する世界として鮮やかに成り立っている作品が『千々にくだけて』である。二〇〇一年九月一一日に起きた連続テロ事件に遭遇した経験に基づくこの作品は、私小説の逆説的な地平を示唆する世界としても捉えられる面をもっている。すなわち、私小説は作者自身に同定される主人公、語り手が自身の身辺に生起した出来事を綴っていく形式だが、その〈身辺〉が世界規模の重大性を帯びた出来事と連続していれば、その極私的な世界が同時に世界を動かす歴史の証言としての意味をはらむことにもなるからである。日本の伝統的な私小説の作者たちは、通例そうした連続性と無縁な地点で日々を送っているために、その身辺の記述が世界規模の出来事の逆説的な証言となることはなかったが、二十一世紀の現代では一般人の生活も高度に情報化された地平において送られており、市井の人間が海外に赴くことも何ら珍しいことではない。そこで国や民族間の政治的な争闘に巻き込まれたりする可能性も決して低くはない。まして日本とアメリカを行き来しつつ、表現者としての活動をおこなっている作者にとってはその確率は一層高まることになる。

今触れたように、リービは二〇〇一年九月にこの出来事にみずから遭遇している。その経緯を記した『千々にくだけて』の「あとがきにかえて――９・11ノート」によれば、九月一一日にバンクーバー経由でニューヨークに向けてエア・カナダ機で発ったリービは、バンクーバーに到着すると、アメリカ合衆

国が大規模なテロを受けたことを告げる「The United States has been a victim of a major terrorist attack」という機長のアナウンスを耳にし、ニューヨークに向かう飛行が不可能になったことを知らされる。バンクーバー空港の到着ロビーに置かれたテレビの画面で「飛行機は、昆虫類にも見えるが、意図的に飛んでいる。明るい燃料の爆発が見えて、赤い炎も見える」（傍点原文）という、高層ビルに飛行機が突入する様を繰り返し眼にした後、リービは予定を変更してカナダに入国し、バンクーバーのアパート式ホテルに宿泊することになる。「九月十一日の火曜日から九月十七日の月曜日まで、ぼくは日本でもアメリカでもない国の地方都市に足止めされた」と記される経験を余儀なくされるのである。

この経験はほぼそのまま作品に取り込まれており、飛行機中で隣席の日本人の老女と交わした言葉も、ほぼその通りに写し取られている。「あとがきにかえて」ではリービはテロ事件が生起した可能性を老女に告げ、「ぼくは今夜、ターミナル・ビルで寝ることになるでしょう、と日本語の笑いをもら」すと、彼女は「戦争が終わったとき、わたくし、三日間も駅のホームで寝ました、いざとなったとき、大丈夫ですよ」と答えるが、ほとんど同一の表現でこのやり取りが作中で語られている。その点で作者自身の経験やその身辺に生起した出来事を綴っていくという、私小説の基本的な形がこの作品でも踏襲されており、それが「二〇〇一年九月一一日をまともに扱った小説が、これまで日本で書かれたことがあるだろうか。あの事件に震撼された経験と正面から向かいあった小説が」（菅野昭正「文芸時評」『東京新聞』二〇〇四・八・二七）と評されるような、作者が遭遇した出来事の生々しい感触を伝える前提となっている。それはいわば虫瞰的な視点から捉えられた世界の歴史であり、一人の中年のアメリカ人知識人の眼差しと足取りとともに、世界を震撼させた出来事の刻々の様相が浮かび上がってくるのである。

しかし『千々にくだけて』は決して「9・11」のルポルタージュではなく、一編の小説作品であり、また私小説の見かけをもちながら、決して技巧を排除した平淡な身辺描写に終始しているわけではない。ここで綴られていく、作者自身と重ねられる主人公が経験した異常な事態の描出には巧みな仕掛けが施されており、そこに作者がこれまで扱ってきた文化や民族・宗教に関わる主題が色濃く盛り込まれていることが分かるのである。

その技巧として見逃せないのは、この作品における主人公エドワードが、些少な〈悪〉の遂行者として描出されていることだ。作品は東京を発ってバンクーバーに向かう飛行機の中で、何とか喫煙を成就しようとするエドワードの苦心の様子が、芭蕉の俳句の想起とともに語られるところから始まっている。表題にも採られている「島々や　千々にくだけて　夏の海」という芭蕉の句が、テロ攻撃によって破壊されるニューヨークの高層ビルに繋がる伏線となっていることはいうまでもないが、この引用自体にすでに技巧が施されている。つまり松島の海をうたったこの句は『奥の細道』には採られておらず、『蕉翁全伝附録』に収載されているが、本来の形は「島々や　千々にくだきて　夏の海」であり、陸地を「千々にくだ」いて「島々」をもたらしたかのような「造化の天工」（『奥の細道』）の技と、「夏の海」がその「島々」の間で波を立てて〈くだけて〉いる様相

がそこに重ね合わされている。十七文字の小宇宙のなかに現実的な光景と観念的な光景が二重写しになる芭蕉独特の奥行きと運動感に満ちた句である。エドワードが想起する「千々にくだけて」も異形として存在する[2]が、一般に流通している形から一字の変改をおこなうことで、「造化」の主体を希釈し、テロ攻撃に晒されて〈くだけ散る〉ように崩壊していく二つのビルのイメージの予兆としての面が強められているのである。

そこに私小説的な体裁のなかに盛り込まれた作者の巧みな技巧が認められる。エドワードはこの句を頭に浮かばせながら機内での喫煙に執着し、禁煙の機内で隣席の老女たちなどの周囲の眼を気にしつつ嗅ぎ煙草や噛み煙草を試みるのである。

説明をすればよかった。しかし、老女はどちらもエドワードが日本語の説明をするのを聞いてくれるような表情ではなかった。だから、何の説明もせずにエドワードは左ポケットから嗅ぎたばこを取り出しては鼻の下につけて、また四時間が経ったところでそれだけでは効かなくなったから右ポケットからカン入りの噛みたばこを持ち出しては、いわゆる外人の野球選手のように一分間歯ぐきの間にころがし、最後には口の端からたれてくる黒い汁をあわてて紙ナプキンでぬぐった。そのたびにとなりの小さくて黒い四つの目から、何語にも訳せないほどするどく軽蔑的な視線をあびる結果となった。

五時間も六時間もの間、嗅いだり噛んだりしているうちに、鼻孔の下はすっかり薄茶色に染り、口の中が真黒になった。夕食の後にトレーに置いた、汚れた紙ナプキンをぎっしり詰めたコップを、スチュワーデスにいっしょに下げるのを拒否されて、「自分でトイレへ持って行って捨てなさい」と叱られることもあった。

「あとがきにかえて」にもこの喫煙への執着は記されているものの、「嗅ぎたばこと噛みたばこを交互に使って辛抱をしているぼくのすぐとなりで、二人の日本人の老女がバンクーバーから乗る客船のアラスカ・クルーズの話題で夢中だった」という叙述からは、作者への「軽蔑的な視線」はむしろ排除されている。またスチュワーデスの叱責も作品にのみ現れるもので、それらによってエドワードの喫煙行為が公衆道徳に反する行為として否定的に意味づけられることになる。

こうした些少な〈悪〉はバンクーバーのホテルに投宿した後の挿話としても語られる。エドワードはホテル近くの「白い紙の上に巨大な黒い×が三つ並んでいる」ウインドーをもつ「未成年立入禁止」の店に入ってポルノ雑誌を購入して部屋に戻り、それを使って「何年かぶりに、自分の手を自分の体に触れながら動かしてみ」る行為に耽るのである。その間にも部屋のテレビでは多発テロ事件の報道がつづけられており、「Oh no!」という叫びが彼の耳に入ってくる。

エドワードはかたくなに目を閉じた。部屋の中に、アラビア語の激声がこだました。

異教徒！

エドワードは「うるさい」とつぶやき、石と鉄筋が流れ落ちる音と、小さな顔の大統領の英語と、逆三角形の長いあごひげ男のアラビア語を、すべて記憶からかき消そうと、手を猛烈に

動かした。Shut up! とひとりで叫び、長椅子に上半身をうしろへひねって、最後の動作を果たした。

当然「あとがきにかえて」には含まれないこうした場面が語られるのは、やはりそれが「五十歳」という年齢が示される主人公にはふさわしくない行為だからであり、さらにそれが部屋のテレビで報道がつづけられるテロ事件と〈同時進行〉的に遂行されることによって、この出来事が内包する巨大な〈悪〉と響き合う形で、彼の行為に〈悪〉としての色付けがされることになる。いいかえればエドワードが作中で遂行する喫煙や手淫といった些少な〈悪〉は、彼をテロリストたちの遂行する巨大な〈悪〉と連携させるための装置であり、それによって彼がテロリストたちに連続する地平に置かれることになるのである。

実際「小さな顔の大統領」として語られる当時のブッシュ大統領はテロ事件当日の一一日に「悪」に対して「厳罰」をもって報いることを誓言している。また翌一二日の声明では「これは善と悪の歴史的な闘争となろう。しかし善が圧倒するであろう」と明言し、この事件を「テロを超えた戦争行為」として受け止めて、それに対する断固たる報復行動を取る姿勢を打ち出している[3]。リービ自身も「あとがきにかえて」にこの大統領による価値付けを次のように記している。

大統領は evildoers はかならず罰せられる、と演説で宣言した。「悪を行う者ども」は、少年時代にサンデー・スクールで牧師から聞いて以来、四十年近く耳にしたことのないことばだった。イスラムは問題ではない、悪が問題だ、と大統領が言った。

「evildoers」ないしその和訳としての「悪を行う者ども」という言葉は作中にも現れるが、エドワードの行為は表層的には「9・11」の同時多発テロから隔絶した地点に生まれていながら、〈悪〉を媒介させることによってその主体と秘かな連携を形成するのであり、その連続性のなかにこの作品がはらむ主題が浮上している。それはキリスト教国によって構成される西欧世界における他者的存在の問題にほかならない。すなわち同時多発テロの実行者は、サウジアラビア出身の活動家オサマ・ビンラディンによって率いられたイスラム過激派組織アルカーイダに同定されていくことになるが、ビンラディンの名前は事件の勃発後すぐに挙げられている。一一日の段階ですでにアメリカ政府当局者はビンラディンが「容疑者のトップリストに入っている」と語っており、テロ攻撃との関連を示す客観的な証拠は何ら見出されていないにもかかわらず、ビンラディンの支持者たちがテロ攻撃について話し合っているのをアメリカ情報機関が傍受したという政府当局者の話が、ＣＮＮテレビによって流されているのである[4]。

それはあたかも、このテロ攻撃が事前に予測されており、その勃発を待ってビンラディンと彼が率いるイスラム過激派組織との「戦争」が宣言されたかのようなのである。実際「9・11」については、事件勃発後の早い時期からアメリカ政府の関与が唱えられており、二機のハイジャック機の突入後に起きた世界貿易センタービルの崩壊にしても、単に飛行機の突入だけでは起こりえない事態として懐疑的に眺める見方が出されている。つまり同ビルには事前に爆弾がくまなく仕掛けられてお

り、ビル破壊作業に準じるやり方で、ハイジャック機の突入にタイミングを合わせて起爆させたという説である。またペンタゴン（国防総省本庁舎）を部分的に破壊したとされる三機目のハイジャック機の突入についても、その損壊の程度や形状は飛行機によるものとしては自然ではなく、むしろミサイルが何者かによって撃ち込まれたと可能性の方が高いという指摘がおこなわれてきた。こうした、ハイジャックされた飛行機による自爆テロの攻撃と、その結果もたらされた甚大な建物の破壊と膨大な人命の損失という、一見明らかな構図自体への疑念が、これまで繰り返し投げかけられている。

この破壊行為の主体をアメリカ政府に帰着させるのは極論の類になるとしても、少なくともこのテロ攻撃の計画をアメリカ政府が事前に知っており、その勃発を阻止しようとしなかったと考えるアメリカ市民は少なくない。『千々にくだけて』発表に近い時期の二〇〇四年八月におこなわれた世論調査では、ニューヨーク在住者の約半数がその見方に賛意を示しているのである。ロジャー・ムーアによる『華氏９１１』もその立場から制作された映画であった[5]。

3　テロリストへの共鳴

少なくともオサマ・ビンラディンを同時多発テロの首謀者とするための根拠は乏しく、一九九三年のニューヨーク貿易センタービルの爆破事件、九六年のサウジアラビアの米軍住宅爆破事件、九八年のタンザニア・アメリカ大使館爆破事件といった、これまでに彼が関与したとされるテロ事件が下敷きとされる形で、反米テロリストとしてその個人名が浮上してきたにすぎない。しかしその名前が挙げられるとともに、ブッシュ大統領がテロリストへの報復攻撃を「戦争」として位置づけることによって、アメリカ対イスラム過激派組織の構図が「善対悪」の価値付けをともなって明確化されてくることになる。また「イスラムは問題ではない、悪が問題だ」というブッシュ大統領の言葉にもかかわらず、その〈敵〉が長い顎髭を生やした中東人のビンラディン個人の肖像を核としてイメージ化されることで、テロリストだけでなくイスラム教徒全般が平和を脅かす敵対的な存在として見なされる傾向さえ生まれてくることになる。ブッシュの言葉はいわば反語的な呼び水として作用するのであり、同時多発テロの勃発後すぐにアメリカ各地でイスラム教徒に対する暴行や脅迫が頻発し、進歩的な大学のキャンパスでも「アラブ人は国へ帰れ」といった落書きがされたりした[6]。

西谷修は『「テロとの戦争」とは何か　9・11以後の世界』（以文社、二〇〇二）で冷戦以降のアメリカの戦略について、「「敵」を人格化し、「顔」を与えてそれを「悪魔」化する。「テロリスト」という言葉も事態を単純化するのに役に立つ。「悪」と「善」の色分けをし、人びとのあいだに「恐怖と憎悪」を醸し出す」と述べている。西谷によればアメリカがおこなおうとしたものは「戦争」ではなく、アルカーイダの本拠のあるアフガニスタンへの攻撃によって世界の主権国家としての位置を強化しようとするものであり、むしろそれ自体がテロ行為にほかならないという。西谷も「アメリカの政府は攻撃を受けることを予測していた」と述べ、同時多発テロの生起に加担したという見方

を示しているが、こうした意識的な方向付けによって、アルカーイダという組織のみならず〈イスラム〉全般を「悪」の地平に置き、市民の多くの犠牲を伴うアフガニスタンへの攻撃が正当化されることになった。

アメリカがテロ攻撃の被害者ではなく、むしろテロ国家そのものであるという見方はノーマ・チョムスキーのインタビュー集『9・11 アメリカに報復する資格はない』(山崎淳訳、文藝春秋、二〇〇一)でも強く打ち出されている。チョムスキーはアメリカを「テロ国家の親玉」と断定し、テロ攻撃への関与についても「いかなる直接的な意味においても、あの攻撃が米国政治の「結果」ではない。しかし間接的には、むろん、あれは結果である」と語っている[7]。二人の論者に共通するのは、アメリカ自身が国際社会における覇権を確立するために「9・11」をみずから呼び寄せ、〈イスラム〉が「悪」として決めつけられることでその犠牲にされたという観点だが、それは彼らに限らず多くの知識人に見られるものであり、リービ英雄のなかにもあったことが想定される。それは『千々にくだけて』の「あとがきにかえて」に、ニューヨーク・タイムズの紙面を読みつつ「国家」ではない「敵」との「新しい種類の戦争」に突入したという論調にはあっけにとられた」と記していることからも察せられる。もともとリービが日本語と日本文学を自身の表現の領域に選んだ基底には、アメリカという自国に対する距離感がうごめいている。リービは「ワシントンの少年――クリントンを追う」(『アイデンティティーズ』講談社、一九九七、所収)というエッセイで、自分が少年期を過ごしたワシントンというアメリカの政治的中枢のある都市について追想しながら、次のように述べている。

> ワシントンの権力から最も遠い日本文学の世界に、ぼくは二十五年間生きてきた。「日本文学」という幅の広い領域の中で、ぼくはほとんど無意識に、「ワシントンの権力」から最も遠いものを選んでしまったのかも知れない。「公」のもの、抽象的なものから最も遠く離れた領域――漢文脈よりも和文脈、憶良よりも人麿、平家物語より源氏物語、近代においてはたとえば私小説、という風に。

ここにはアメリカ文学をはじめとする西洋文学との対比からではなく、「ワシントンの権力」という政治性に距離を取る姿勢によって日本文学を選んだ経緯が示されている。リービ自身の作品が私小説のスタイルを取っている事情の一端がここに現れていることも興味深いが、リービがアメリカの政治権力に対してきわめて意識的であることはこうした叙述からも明瞭であろう。とくにアメリカが滅ぼそうとしている相手が「悪」として措定されていることは、前節で見た『千々にくだけて』の主人公エドワードがおこなう些少な〈悪〉と響き合い、その共鳴が意識的な虚構としてもたらされていることに強く示唆されているのである。

もちろんリービはイスラム教徒ではなく、先に引用したように「半分がユダヤ系で、半分がポーランド系」という家庭に生まれ育っており、本人はユダヤ人としての意識を「イスラエルの夢を持っていないユダヤ人」(『星条旗の聞こえない部屋』)という否定的な形で持っている。流離の宿命を歩んできたユダヤ

民族からさらに流離した存在として自己を捉えるこうした自己認識は、当然自身をアメリカ社会において異端的な存在とすることになる。そしてその異端性において、〈イスラム〉と自己との連携がもたらされているのである。

現実にはパレスチナの状況が示しているように、イスラエルと周辺イスラム諸国との間には一九四〇年代以降の闘争が持続しており、決して〈ユダヤ〉と〈イスラム〉が親しい関係にあるわけではない。イスラエルが建国されたのは一九四八年五月であったが、それはイスラエルがユダヤ人生誕の地であることに則り、この地にユダヤ人の国家を建設することで長い流離と苦難の歴史に終止符を打つためであった。アメリカは第二次世界大戦後の冷戦構造のなかでトルコ・イランといった反共国家を支援していたが、イスラエルを反共の砦とするとともに中近東から地中海への石油パイプラインを確保する企図もあって、イスラエルを支持していた。アメリカとイギリスが共同で設置した調査委員会が四六年五月に発表した報告書では、戦時中のホロコーストを免れたユダヤ人のためにユダヤ人の国家を建設する必要があることが明言され、ムスリム（アラブ人）とユダヤ人の対立を緩和するために国際連合の委任統治下に置かれることが提言されていた。しかし現実にはパレスチナの土地を奪われたムスリムとの間に数次にわたる中東戦争が繰り広げられ、現在なお収束する気配がないことは周知のとおりである。

ムスリムがアメリカをはじめとする世界各地でテロ行為を敢行するのは、キリスト教徒とユダヤ教徒に打撃を与えるためであり、とりわけイスラエルの側に立ってパレスチナに軍事介入してくるアメリカに対する敵意、反感は著しい。『千々にくだけて』に、テレビに映ったビンラディンと見られる男が「異教徒どもに死を」と言うくだりがあるように、彼らにとってはアメリカ人は駆逐されるべき「異教徒」にほかならない。しかし当然アメリカの側からすればムスリムの方が「異教徒」であり、アルカーイダのような過激派のテロ行為によってムスリム全体が「悪」のイメージを帯びた、排除されるべき「異教徒」として位置づけられる流れが「9・11」以降起こってきたのだった。

一方ユダヤ人は長い流離の歴史を持ち、戦時中にはホロコーストの犠牲となった反面、アメリカ国内では強力なロビーを形成し、イスラエルの保全を政府に働きかけるなど、政治権力の中枢に関与する力を持っている。しかしその政治権力に距離を取りつづけるリービにとって、自身の内にも流れるユダヤ人の血は、定住の地を持たずに世界を流離しつづけた「異教徒」としての民族のしるしであり、自身が個的に抱える流離感の逆説的な根拠ともなるものであった。同時に彼の内にある流離感がそうしたユダヤ人のイメージを強化しているのでもあるが、いずれにしても彼のなかのユダヤ人としての意識は、自身が〈アメリカ〉に対して抱かざるをえない他者意識と共鳴する形で、むしろ〈イスラム〉の側に自己を立たせることになるのである。そして両者を媒介する要素として〈悪〉が作中に技巧的に盛り込まれているのだった[8]。

それを傍証するように、エドワードは作中でムスリムに想定されるテロ攻撃の遂行者に対する憎悪や嫌悪を語ることはなく、むしろ〈被害者〉であるアメリカ人への違和感を覚えてい

る。二日後の九月十三日にはホテルのテレビで、犠牲者の追悼式で老牧師が「かれらは主といっしょにいる、だから、かれらのことを思うと、むしろよろこぶべきだ」と宣言するのを見て、彼は「天国だって？　かれらはみんな、下の方へ落ちて行ったんじゃないか！」と「日本語の声」で「反論をとなえ」、その式の光景が終わった後では、「かれらは、何ごとにもさらされていない」「かれらのために、誰が死ぬものか」（傍点原文）という反感をやはり「日本語の思い」として募らせるのである。

こうした叙述からも、エドワードが世界の覇権者としてのアメリカの側に立っておらず、むしろ「異教徒」としてのムスリムに自己を重ねようとする心性をその内にはらんでいることが分かる。こうした社会における〈異端〉的存在を自己の秘かな分身として位置づける感覚は、ワシントンに帰郷して母と知的障害者である弟と再会する話を語った『国民のうた』からも見て取られる。四十歳という年齢ながら「六歳の子供の顔」をした弟はわずかな言葉しか口にすることができないが、兄の「かれ」を迎えて「come home! come home!」と繰り返し、「かれ」もそれに応えて「Yes, come home」と「久しぶりの母国語」でつぶやく。しかし「かれ」は自分がめったに帰郷しないことを母に難じられると、たちまち実家に違和感を覚え、「帰ってきたばかりなのに、帰りたい」という感慨を「日本語」で浮かばせる。

ここでほとんど言葉によって自己表現をすることのできない弟の姿は、英語という母国語にすでに距離感をつくってしまい、内心の切実な思いを浮かばせる時は日本語という〈外国語〉に頼ってしまう「かれ」のあり方を比喩的に強張する形で示しており、その点で彼の分身として存在しているといえる。作品の末尾で描かれる、「かれ」が母と弟とで赴いた「精神遅滞者のホーム」で、弟と同様の障害を持った人びとのなかに入る場面で、そのなかの一人がプレゼントを四方に投げながら「Take me home! Take me home!」と叫ぶのも、明らかに「帰りたい」という「かれ」の心情の代弁でもあり、やはり社会におけるマイノリティである知的障害者と主人公が分身的な関係にあることが示唆されているのである。あるいはその関係性を暗示するために、この二つの表現の照応が技巧的に施されているということでもある。

4　日本語という居場所

そしてリービの人物たちが〈帰る〉場所として提示されるのが、つねに日本語という言語であったが、ワシントンへの帰郷を内容とする『国民のうた』ではそれがとりわけ強く焦点化されていた。今引用した「帰ってきたばかりなのに、帰りたい」という思いにつづいて、次のような叙述がなされている。

> 「かえりたい」という日本語が、意味をもつ以前に、まずはぬくもりのある音の連続としてかれの頭に響いた。毎年、こういうとき、「かえりたい」、「かえれる」という音の響きがかれにとって唯一の救いとなっていた。

ここで「かれ」を捉える「帰りたい」という欲求が示す先が、

「日本」であると同時に「日本語」でもあることはいうまでもない。本来アメリカ人であるリービにとって外国語である日本語は、出ていく先であって〈帰る〉対象ではないはずだが、その言語を「帰りたい」相手として捉える感覚にこの作家の個性が滲出している。すなわち先に引用したように、リービは「「ワシントンの権力」から最も遠いもの」として日本語の世界に親しむようになったわけだが、その心的な傾斜のなかで彼の同一性が形成されていったとすれば、日本語は確かにその同一性と軌を一にする対象である点で、自己が〈帰る〉先として措定されることになるからである。

『千々にくだけて』の場合は、それが作品の主題とも連携している。ここではエドワードは「9・11」との遭遇によって、母国への帰郷を企図しながら文字通り〈帰れなく〉なってしまうからだ。ここではリービの作品群を貫流する、帰属先の曖昧さと照らし合う自己同一性の危うさという主題が、行くべき地点に空間的に辿り着けないという状況に比喩的に託される構造が明瞭である。この作品が二〇〇五年の大佛次郎賞を受賞した際の選評でも、「よるべなく漂う、浮遊不所属の一作」（高樹のぶ子）、「中ぶらりんに行き場を失った主人公の無国籍的な感想が皮肉なタッチで綴られていく」（山折哲雄）といった把握がされている[9]。

こうした評価は妥当だが、ここで見てきたように『千々にくだけて』は単に大規模なテロ攻撃の機会に行き会うことによって「行き場を失った主人公」の姿を描いているだけではなく、ここで見てきたように、そこには〈異端者〉的な眼差しをテロリストと共有しつつアメリカの覇権主義に対する辛辣な批判が投げかけられていた。イスラム過激派によるテロ攻撃は、この覇権主義への抵抗の表現にほかならなかった。そこに主人公エドワードが秘かな共鳴を示すのは、彼のなかにも「ワシントンへの権力」への距離感があり、それが彼の場合は〈英語帝国主義〉に対する相対化としての日本語への愛着という形を取って現れるからでもある。

現にリービは多和田葉子との対談「母国語から遠く離れて」（『文學界』一九九四・五）で、「ぼくの場合、結局、日本語そのものを肯定しているわけですよ。ぼくは日本語の中へ脱出したわけです」と語っている。多和田はドイツに在住して活動する作家としてしばしばリービと比較される作家だが、その位置は決して対称的ではない。多和田もドイツ語による作品があるものの、基本的には日本語による表現者であり、当然日本語への対し方はリービと異質である。この対談で多和田は子供の頃日本語を使わないで生きている人間が世界にいるということが信じられなかったくらい「言語イコール日本語」であり、「私はまさに日本語の奴隷だったんです」と言っている。それにつづいて多和田は「ドイツに来て突然、日本語というのは私と一体のものじゃなくて、独立した生命を持つ生き物みたいなものだとわかったんです」と語っているが、こうした感覚によって母国語である日本語に対して「いわゆる上手い日本語、綺麗な日本語というのを崩していきたい」という姿勢を示している[10]。それに対して今引用した発言をリービはしているのである。多和田にとっては日本語は母国語であるゆえに「崩していきたい」という相対化の欲求を駆り立てられる相手であるのに対して、リービにおいては英語という母国語を相対化した結果とし

て日本語の世界への関与が生まれているのであり、おのずと「日本語そのものを肯定」する姿勢が取られることになる。

もっとも〈帰る〉先として日本語が強く前景化されている『国民のうた』と違って、『千々にくだけて』では芭蕉の俳句に託された日本語の時空はテロ攻撃に出会うする前にその予兆として提示されていて、それが主人公を慰め、包摂するものであるという価値づけは明瞭ではなかった。そしてそこにこの作品がはらむ主題性が現れているといえるだろう。すなわち、ここでは日本語は単に主人公の慰安の在り処ではなく、底流する政治的な眼差しと呼応しつつ、〈異端〉ないしマイノリティの言語としての意味をはらんでいるからだ。実際リービは「越境して見出す日本語の強み」（『Voice』二〇〇二年三月号）というインタビューで、「9・11」との遭遇によってカナダ・バンクーバーに投宿していた際、「西洋世界の大連帯」が展開される一方、日本に関する情報を断ち切られ、「西洋世界のなかでは、日本については情報がないし、関心もない。そのことをつくづく感じてしまった。周辺のどうしようもない悲惨な状態のなかに日本語は立たされているということを、久々につくづく感じさせられました」と語っている。

こうした「西洋世界」においてはマイノリティでしかない日本語を、リービは自身の活動と表現の領野として選んだわけだが、しかしもともと「ワシントンの権力」から遠ざかることがその選択の動機としてあった以上、その位置づけは了解済みのものでもあっただろう。リービはこのインタビューで「僕は越境して日本や中国の問題を描いている人間です」と自己規定しており、その立場から、ムスリムによるテロ攻撃によって西洋世界が「文化防衛」に走ることを危惧している。それは自身の取ってきた方向性を危うくするだけでなく、多文化的な価値観によって営まれるべき現代世界の潮流への逆行ともなるからであろう。

その点で作者の経験を写す形で『千々にくだけて』の主人公が投宿することになったのが、カナダ・バンクーバーという都市であったことは示唆的でもある。カナダは移民政策を推し進めてきた国であり、とくに一九七〇年代以降は中国・韓国のアジア系の移民が急増している。約二一〇万人の人口を擁するバンクーバーの都市圏では、約四〇万人の中国系、約四万人の韓国系の住民が居住している[1]。作中でもエドワードがホテルから出て街路を歩いていると、ハングルの看板が並ぶ通りに入り、「広い歩道の並木のかげですれ違う三々五々の人のかたまりからヌンヨとムニッカのような音がもれていた」というくだりが見られる。まさにリービが本来肯定する多民族、多文化的な空間として、エドワードが滞在する街が描かれており、そうした性格をテロリストへの報復によって暴力的に否定するかもしれないアメリカの状況が、それと同時的に対置されているのである。

このように『千々にくだけて』は、作者自身の経験に基づく私小説としての形式を踏襲しつつ、その経験が世界を揺るがす出来事と交差することによって、作者固有の主題と現代世界を覆う問題性を重ね合わせて浮かび上がらせる、巧みな構築をはらむ作品であった。ここで示唆されているマイノリティの言語としての日本語のあり方は、しかしリービにとって決して弱点としては作用していない。それは彼の政治的な立場と呼応して

いるからというだけでなく、表現者としての支えにも転じうるからである。リービは「万葉青年の告白」（『アイデンティティーズ』講談社、一九九七、所収）というエッセイで、日本文学研究者としての自身の研究対象である『万葉集』を何よりも「新鮮」な言葉の世界であり、「物を活かすことばという「詩」の本来の意味を暗示した、世界最大の詩集の一つ」として捉えている。さらに「それは武器でも宗教でもイデオロギーでもアイデンティティーの保証でもない」と述べられているが、ここで示されているように、リービが青年期に出会った日本語は、言葉によって「物を活かす」という、表現者としての本質的な職能にかなう言語として受け取られている。

もちろんそれは英語やフランス語でも可能であるとはいえるが、「「公」のもの、抽象的なものから最も遠く離れた領域」として選んだ日本語とそれによる文学は、流離感、疎外感を抱かされがちであったリービにとって、自己と外界の「物」の生命を強固に結びつける媒体であった。そこに生まれる親和は、やはり日本語が世界的にはマイノリティな言語であったから可能となったものに違いないのである

註

1　講談社文芸文庫『星条旗のきこえない部屋』（二〇〇四）掲載の自筆年譜による。以下リービの伝記的事項については主にこれによっている。

2　『蕉翁文集』には「くだけて」の形で収載されている。芭蕉は『奥の細道』の途上、松島でこの句を作ったが、『奥の細道』には採られず、同行者の曾良の「松島や鶴に身を借れほとゝぎす」が収載されている。「島々や」の句も佳句であると思われるが、「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」や「夏草やつはものどもが夢の跡」といった知悉された句と比べると、〈島―海〉という構図が視覚的な表象として常識的な連想のなかにとどまると判断されたのかもしれない。

3　『The New York Times』二〇〇一年九月一二、一三日による。

4　『朝日新聞』二〇〇一年九月一二日による。この情報を載せた同日の紙面では他国の見解も紹介されているが、それによるとフランスでもテロ攻撃の勃発後すぐにビンラディンの名前が挙げられている一方、エジプトの専門家は「これだけの人材をそろえ、疑われないように配置できるのは、中東人の組織では無理」という判断を示している。

5　「9・11」同時多発テロの「陰謀説」については、ベンジャミン・フルフォード『暴かれた9・11疑惑の真相』（扶桑社、二〇〇六）、デイビッド・レイ・グリフィン『9・11の矛盾　9・11委員会報告書が黙殺した重大な事実』（加藤しをり・きくちゆみ訳、緑風出版、二〇一〇）、井野晃『9・11の真実』（ブイツーソリューション、二〇一三）などを参照した。

6　N・チョムスキー『9・11 アメリカに報復する資格はない』（前出）による。

7　チョムスキーは「米国は国際的テロを続けている」と断定し、その例として一九八五年のベイルートでの爆弾テロ事件、一九九七年のスーダンでのアル―シーファ薬品工場への爆撃を挙げている。

8　ムスリムとユダヤ人の関係については主に守川正道『アラブとユダヤ』（三一書房、一九七五）、D・K・シプラー『アラブ人とユダヤ人――「約束の地」はだれのものか』（千本健一郎訳、朝日新聞社、一九九〇）、藤原和彦『アラブはなぜユダヤ人を嫌うのか――中東イスラム世界の反ユダヤ主義』（ミルトス、二〇〇八）を参照した。

9　大佛次郎賞の選評については『朝日新聞』二〇〇五年一二月二二日に掲載されたものを参照した。他にも井上ひさしは「9・11事件以降の世界に生きるわたしたちが強いられている宙ぶらりんの状況、それが強い文章で正確に剔出されている」、川本三郎は「想像を絶する事件が起きた時に、ただ、うろたえ、おびえ、とまどうしかない、ぶざまな自分を冷静に描き出した」と述べている。

10　こうした姿勢を反映して、多和田の世界では当然〈日本語〉に回帰する構図をもつ作品は見られない。『文字移植』(原題『アルファベットの亀裂』、『ブックTHE文藝』1、一九九三・三)ではドイツ語の物語を日本語に翻訳する女性が語り手として登場するが、彼女は編集者に翻訳の仕事の面白さを問われて、「反射的に〈ぬっと出てくるものがあるんです。〉と場違いに情熱的に答えてしまった」りする。実際この作品では後半部分で「張り裂けるほど大きく開けた口」で「叫び、そして喚き、唸」る「大蛇」の姿のイメージが明瞭に前景化されており、彼女の理念が表象として現れている。多和田が日本語とドイツ語の間を往還しつつ、表現の営為をおこなう作家であることは、この二つの言語の間でまさに「ぬっと出てくるもの」に遭遇するための受動性を積極的に保持しようとする姿勢としての面をもっているだろう。

11　Wikipedia「バンクーバー(ブリティッシュコロンビア州)」による。なお数値は二〇〇六年度のものである。バンクーバーのアジア系移民は中国系が圧倒的な比率を占めるが、リービがここで韓国系の住民を登場させたのは、実際の経験に即するものであったであろうとともに、やはり日本語と同じく少数性を帯びた言語の主体だからであろう。